

「全少」を日本一研究する指導者による提案



第91回

養正館館長 渡辺貴斗

ZENSHOに 挑戦しよう!



ウチの子、もしかして発達障害? (その7) 発達障害なんて認めない!

★ウチの子は発達障害じゃない!

自分の子を発達障害ではないかと疑っているのはお母さんの方で、お父さんはそれを認めない、というご家庭が多いように感じます(もちろん逆もありますが)。お父さんが認めたくない理由は、私の過去の経験から、概ね以下のおおわりとお考えます。

「自分の子供にそもそも障害などない、検査なんて必要ない」

「発達障害だなんて、世間からどんな目で見られるだろう」

「自分の子供が普通でないなんて受け入れられない」といった、発達障害について差別的、否定的に捉えている人の特徴的な考え方が目立ちます。そして、妻に向かってこう言います。「まだ子供なんだから成長につれて自然と良くなっていくはずだ。だいたい、躰しつけをやってくれるというから空手を選んだんじゃないか。お前の躰しつけの仕方にも問題があるんじゃないか?」と。最後にはお母さんに刃やいばが向くのです。

お父さんの実家に帰省した時など、姑しゅうとめからも躰しつけができていないとお母さんが非難されます。専門機関に相談に行くことも、このように周りから反対されていますので、相談する人もなく孤立していきます。「この子は発達障害ではないか?」と初めは子供のことを疑っていたのに、「もしかして、私の育て方が悪いのではないか?」と自分を責め、自らを追い詰めていきます。そんなとき、「しつけに困っていませんか?」という言葉が目飛び込んで、気づいたらチラシに書いてある電話番号を押していた、といったパターンで道場に来られるお母さんが最近とても多くなりました。お父さんが頑かたくなに受け

入れないことで、話がそこで止まってしまう、何の配慮もされずに何年も放置されてしまっているグレーゾーンの子どもたちが、少なからず一定数いるように思います。

★いちばんの理解者はやっぱりお母さん

我が子をグレーゾーンと疑っている、初級の部のあるお母さんから、最近相談を受けました。「父親は朝早く出勤して夜遅く帰宅しますので、息子と一緒にいる時間は週末だけです。週末、父子で遊ぶ時間は貴重で、息子はお父さんといるときは興奮しているの、公共の場で落ち着きなく暴れても、息子は楽しんでいると父親はとらえて、普通の子と違うということに気づいていないようです」と、そのお母さんは分析されていました。

授業参観では独り言をしゃべり続け(かつ、せわしなく動き)、家庭でも宿題をやるときの集中力のない様子からも、お母さんは息子さんの発達障害(特にADHD)を強く疑っておられました。そして、「父親は切り取られた息子の一部しか見ていないので、簡単には認められないのでしょうか」とおっしゃっていました。

通常、お母さんが発達障害を疑っていない場合は、こちらからは踏み込んだ行動は取りません。しかしながら、「本当は専門機関に相談に行きたい」、「自分の子は100%発達障害だと思う」、「学校生活に大きな支障が出ていて困っている。だけど父親は分かってくれない」など、こちらに助けを求めている場合は、私たちも踏み込んだ対応を取ることもあります。お父さんを怒らせて退会に発展してしまったこともあります。あのととき道場が気づかせて

くれたお陰で、この子の今がある」と、5年後、10年後になって、私たちの想いに気づいて、少しでも肯定的にとらえていただけたら本望です。

★家では、よい子

家庭と道場での態度が違う子がいます。家庭ではお父さんが厳しいので、緊張してなんとか表面上取り繕っていますが、その反動で道場では羽を伸ばして指導者の言うことを聞かずに暴れまわってしまうパターンです。こういった子たちが一定数います。

お母さんは発達障害を強く疑っているが、お父さんは自分の子は発達障害だとは夢にも思わないわけです。お父さんが何でも決める、亭主関白の家庭に多いと思われまます。

先日、言うことを一切きかない暴れん坊H君に、私も最後は呆れ果ててしまい「先生の言うことがきけないんだったら、お父さんに電話してお迎えに来てもらうぞ」と携帯電話を持って冗談半分で言ったから、「ごめんなさい、もうしません」と急に泣き出し、想定外の掌返しの態度にびっくりした、といったことがありました。冗談半分で脅すつもりはなかったのですが、結果として脅してみたいになってしまい猛省しました。

★お母さん、まったく問題ありませんよ

ある園の経営者から聞いた話ですが、「数年我慢すれば、その子は自動的に卒園していくので、あまり大ごとにはしたくないですよ」と伺ったことがあります。この経営者の考えるように、グレーゾーンと思われる園児たちは、ただ単に幼少なだけで発達障害ではない可能性も十分ありますので、無理に発達障害の検査をさせて保護者とトラブルになるこ

とを考えると、すべてを明らかにするのはエネルギーが要りますし、リスクが高いと思われまます。

しかしながら、その園の対応は、“事なかれ主義”ともいえます。1年生になって学校から発達障害の検査を勧められたら「園はあのとき分かっていたはずなのに、なぜ教えてくれなかったのか？ 知っていたらもっと早く手を打っていたのに」と保護者は憤りを感じることでしょう。保護者に「お子さん、まったく問題ありませんよ」と言うのはラクですが、無責任でもあります。とはいえ、発達障害の可能性をこちらから切り出すのは、そのあとの保護者との関係性を考えると勇気が要ります。それでは、どうしたらよいのでしょうか？

それは、道場で何が起きているのか、事実だけを客観的に保護者に伝えればよいのです。こちらの思い通りに誘導するような言い方ではなく、アドバイスなども基本的には不要です。「道場は困っています」のような言い方ではなく、一番困っているのは本人ですので、本人目線で、また保護者の立場になって、道場で起きている事実だけを伝えます。そのような事実を聞いたあとは、どうするか決めるのは保護者であり、指導者は保護者の判断に従うしかないので。

PROFILE

■渡辺真斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞を連続で記録する。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その 38

■強者の戦略 総合戦

今回は強者についてお話しします。強者は総合戦を展開しなければなりません。弱者が1点集中してきたら強者は圧倒的な量でそれに対抗すれば良いのです。そうすれば弱者は守りに転じなくてはなくなり、1点集中を続けることができなくなります。圧倒的な量とは具体的には、弱者の√3倍以上のことを言います。ここでは具体的な計算方法を避けますが、1.7倍と覚えておいてください。

強者が考えるべき戦略とは、商品力と販売力です。商品力とは、指導理念、月会費、多岐に渡ったクラス編成などです。販売力とは指導者の数及びその質、入会後の保護者や生徒さんへのフォロー、チラシの数及びその質、道場の広さや稽古時間などです。

強者は、質的なものは最低でも弱者と同レベルを保ち、その上で、量的なものは弱者の√3倍以上を保つことが必要となります。√3倍以下ですと、弱者に逆転される可能性があるからです。強者は潤沢な資源（カネ・ヒト・モノ）がありますので、惜しむことなく量的に資源をつぎ込むことができます。弱者はそのパワーに一度は屈しますが、再び立ち上がり次の策を講じてきます。そのたびに、強者はそれを上回る量的な資源の投入で対抗してください。すると、弱者は次第にあきらめの境地に至ります。このように多角的で絶対的な量的手段を講じることで、それらが相乗効果を伴い、強者は絶対王者として地域に君臨できるのです。